

【済々黉―常総学院】5回裏、常総学院1死一、三塁。池沢の三口で三走浅沼(左)を挟殺する済々黉の捕手安藤



## 好機逃さず守り抜く

投手を中心に堅守で耐え忍び、限られた得点機を確実にものにする。たった一度のチャンスで効果的に得点した済々黉が「らしさ」を存分に発揮し、55年ぶりの「春1勝」をもぎ取った。

「序盤は1、2点のビハインドで折り返し、終盤で一気に逆転」というシナリオを描いていた済々黉の池田満頼監督。四回に2得点し、そのまま逃げ切った展開に「まさか先制点を奪うとは」と驚きの表情を見せた。

チャンスは少なかつたものの、相手エースを6回で百球以上投げさせるなど、持ち前の「粘り」は健在。2打席で計14球を投げさせた7番西橋豪二郎は「結果的に三振だったが、必死

で食らいついた」と振り返る。守っても内野陣を中心に無失策の堅い守りで、主戦左腕大竹耕太郎の完封劇をがっちり支えた。

ただ、指揮官は「三振が多過ぎる。相手投手にリズム良く投げられてしまった」とスリーバント失敗を含む11三振を喫した打線に苦言。中川洸志主将も「簡単に3球で終わってしまう場面もあった。まだまだ自分たちの野球を出し切れていない」と課題を口にした。

次の済美(愛媛)戦は、150km/h超の速球を投げる剛腕・安楽智大が待ち構える。「速球対策は必要だが、自分たちの野球で勝ちにいく」。中川主将は力強く語った。(前田晃志)

【済々黉―常総学院】5回裏、常総学院の攻撃を三塁手岡(右)が好プレーでしのぎ、遊撃手中川とタッチ



### 先制点お膳立て

①：「あそこで簡単に倒れたら、流れが相手にいってしまふ。とにかく粘ろうと思った」。先制点をお膳立てした済々黉の川原諒平は声を弾ませた。

四回、先頭の中川洸志がチーム初安打で出塁するも、けん制に誘い出されてタッチアウト。「バ献したい」

【済々黉―常総学院】4回表、済々黉1死一塁。大竹の中越え適時三塁打で一走川原が先制の生還



ントするつもりだったが、すぐに気持ち切り替えた」と川原。4球目を詰まりながらも右前に運んでつなぎ、続く大竹耕太郎の三塁打で一気にな制のホームを踏んだ。ただ、続く2打席で連続三振に倒れたことをしきりに反省。「要所で打てたのは良かったが、次は得意のバントでも貢献したい」